

伊治城跡

— 平成17年度：31次発掘調査概報 —

平成 18 年 3 月

宮城県栗原市教育委員会

序 文

栗原市は宮城県北西部に位置し、平成17年4月1日に旧栗原郡全10町村の合併により誕生した、県内最大の面積を誇る自治体です。市内には豊かな自然と歴史的遺産が数多く残されており、国指定文化財11件、県指定文化財18件などが大切に守り継がれてきました。これらの貴重な歴史的遺産を次の世代に継承していくことは、今の時代を生きるわれわれの責務であります。

昭和52年度から3年間、宮城県多賀城跡調査研究所によって多賀城関連遺跡として発掘調査が行われました。その後、昭和62年度から旧築館町教育委員会が宮城県教育庁文化財保護課の協力を得て発掘調査を行ってきました。その結果、伊治城が城生野地区にあったことを考古学的に実証することができました。東北地方の古代史を語るうえで伊治城は大変重要であり、創建年代と所在地が確定している数少ない城柵の一つです。また、伊治城が創られるとともに栗原郡が建郡され、律令国家の支配下に組み込まれていきますが、思うように支配体制が浸透しなかったことなどが正史によって知ることができます。

発掘調査によって、伊治城跡の概要がほぼ解明されたことから、平成15年8月27日に国史跡に指定されました。平成16・17年度の2カ年間で、伊治城跡保存管理計画策定事業に取り組んできました。今後、伊治城跡保存管理計画をもとに史跡整備基本計画を策定し、環境整備事業に取り組んでいきたいと考えております。

最後になりましたが、調査にご指導・ご協力していただきました、宮城県教育庁文化財保護課、宮城県多賀城跡調査研究所及び、発掘調査を実施するにあたり土地を貸していただきました方々には深く感謝申し上げます。

平成18年3月

栗原市教育委員会

教育長 佐 藤 光 平

例　　言

1. 本書は、宮城県栗原市築館字城生野に所在する伊治城跡の平成17年度発掘調査（第31次調査）の概報である。
2. 調査は、国庫補助事業にもとづくものであり、栗原市教育委員会が主体となり、栗原市教育委員会・宮城県教育庁文化財保護課が担当した。
3. 調査時における地区割りは、城生野分館前の伊治城跡「原点1」を基準点（0.0）とし、この点と「原点2」と結ぶ線を基準として直角座標を組み、割り出している。基準線の南北軸は、 $2^{\circ} 7' 9''$ 西偏する。基準点の座標値（第X系）は以下のとおりである。

原点1 X = -136,867.547 Y = 17,758.857 (世界測地系—TKY2JGDにより変換)
原点2 X = -136,864.350 Y = 17,845.295 (世界測地系—TKY2JGDにより変換)

平面図中の地区割り：S-20、E-20などの表記は、それぞれの基準点から南に20m、東に20mの位置にあることを示している。
4. 本遺跡の位置を示した地形図（第2図）は、国土交通省国土地理院発行の1/25,000の地形図「金成」、「築館」を使用して作製した。
5. 土色の記載は「新版標準土色帳」（1973）にもとづいた。
6. 本書の作成にあたっては、栗原市教育委員会文化財保護課と宮城県教育庁文化財保護課が担当し、担当者全員の討議・検討を経て、I～IV・VI千葉長彦、V大場亜弥、VII～VIII千葉長彦・安達訓仁、図版大場亜弥・三浦実が担当し、千葉長彦が編集・執筆した。
7. 発掘調査および本書の作成に際しては下記の方々からご教示・ご指導を賜った。

進藤秋輝（宮城県考古学会）、今泉隆雄（東北大学大学院文学研究科教授）
8. 本遺跡では、遺構に種類ごとの略号と検出順の番号を付している。種類ごとの略号は以下のとおりである。

建物跡=SB、土取り跡など=SX、溝=SD、土坑=SK
9. 発掘調査の記録や出土品は栗原市教育委員会が一括して保管している。
10. なお、これまでの本遺跡の発掘調査および調査報告書（19冊）については、本文の後の付表1にまとめて示している。

目 次

序 文

例 言

目次・調査要項

| | |
|-------------------------|----|
| I. 遺跡の位置と地理的環境..... | 1 |
| II. 遺跡の概要..... | 1 |
| III. 遺跡周辺の歴史的環境..... | 2 |
| IV. 調査の目的..... | 5 |
| V. 基本層序..... | 5 |
| VI. 検出した遺構と遺物..... | 5 |
| VII. 考 察..... | 16 |
| VIII. 調査のまとめと課題..... | 20 |
| 参考文献..... | 21 |
| 付表1. 「伊治城跡」発掘調査および報告書一覧 | |
| 付表2. 伊治城および栗原郡に関する古代史年表 | |
| 写真図版 | |
| 報告書抄録 | |

調 査 要 項

1. 遺跡名 史跡 伊治城跡（宮城県遺跡登録番号：41007）
2. 所在地 宮城県栗原市築館字城生野地蔵堂1-4
3. 調査主体 栗原市教育委員会教育長 佐藤 光平
4. 調査担当 栗原市教育委員会文化財保護課
千葉 長彦 大場 亜弥 安達 調仁 三浦 実
5. 調査協力 宮城県教育庁文化財保護課 佐藤 憲幸 村上 裕二
6. 調査期間 平成17年8月29日～10月25日
7. 調査面積 約200m²

I. 遺跡の位置と地理的環境

伊治城跡は、宮城県栗原市築館字城生野に所在する。遺跡が所在する宮城県北部の地形をみると、東側の海岸部には北上山地が、西側には奥羽山地が南北に走り、中央部を北上川が南流している。西側の奥羽山地は山麓部で多數の河川によって開析され、いくつかの丘陵に分岐している。そのうち、最も北側にある築館丘陵は江合川と迫川に挟まれており、丘陵端部ではさらに多くの小丘陵に分かれている。

遺跡は標高20~28mほどの小丘陵東端部に続く河川段丘に立地しており、北側は二迫川、南側から東側にかけては迫川、西側は北から入り込む沢によって囲まれている。遺跡の範囲は、これまでの調査成果や地形から、おおよそ東西700m、南北900mほどと考えられる（第3図）。

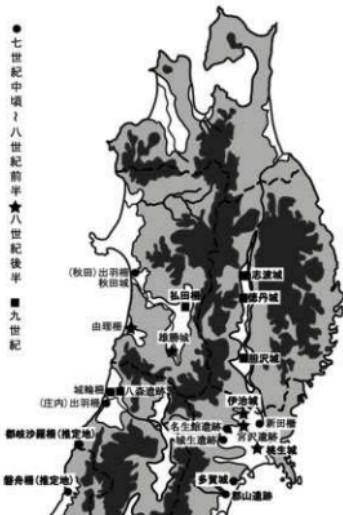
II. 遺跡の概要

伊治城は、8世紀後半から9世紀初頭にかけて律令政府が東北地方経営のために設置した城柵の一つである。奈良・平安時代の政治・軍事の中心地である陸奥国府多賀城と、平安時代に鎮守府が置かれた胆沢城とのほぼ中間に位置している（第1図）。

また、桃生城と共に創建年代が明らかな城柵として重要で、その所在地については多くの論考があり、本地区も有力な擬定地の一つであった。この間の詳しい研究史については、「伊治城跡I」（宮城県多賀城跡調査研究所：1978）を参照していただきたい。

昭和52年から3年間にわたる宮城県多賀城跡調査研究所の発掘調査や、昭和62年からの築館町教育委員会・宮城県教育委員会による発掘調査で、本遺跡が伊治城跡であることが明らかとなった（付表1）。土塁あるいは築地塀と大溝による外郭区画施設を周囲に巡らし、その内部の南に偏った部分に東西約185m、南北約245mの平行四辺形に築地塀で区画したとみられる内郭を配していること、内郭の中央に東西55m、南北60mの方形に築地塀を巡らせた政庁が存在することが明らかになった。

政庁には正殿を中心として脇殿や後殿、前殿などが配置されている。これらの建物群は大別して3時期の変遷があり、2時期目は火災にあっている。内郭は建物を主体とした官衙ブロックが設けられ、とくに北



第1図 東日本の古代城柵（進藤 1991一部改変）

西部は、創建期に桁行き 5 間の建物 6 棟以上が南に開く「コ」字型配置をとっている。外郭は、施設の違いから内郭北辺を境に 2 分され、南側は建物・竪穴住居などで構成される官衙城であり、伊治城全体からみて 2/3 以上を占める北側は、竪穴住居を主体とする住居域として利用されていたと考えられる。外郭区画施設は北辺を土塁と大溝、南辺では築地堀である可能性が高く区画施設に取り付く建物を確認している（第 3 図）。

出土遺物で特筆されるものとしては、日本で初めて円の一種である「筈」の一部「機」が出土した（第 25 次調査）。

平成 15 年 8 月 27 日には内郭城を含む 93,581.47m² が国史跡に指定された。平成 17 年 7 月 14 日に未同意だった 2,900m² が追加指定され、指定面積は 96,481.47m² となっている。

史跡指定にともない、平成 16・17 年度の 2 カ年間で保存管理計画策定事業を行った。平成 16 年度は航空写真による地形測量を行い、1/1000 の地形図を作成した。平成 17 年度は保存管理計画策定委員会を設置し、保存管理計画を策定した。

III. 遺跡周辺の歴史的環境（第 2 図）

このことについては、「伊治城跡・嘉倉貝塚」（築館町教委：2002）で詳述しており、参照していただきたい。以下では伊治城と同時代の奈良・平安時代の周辺の遺跡を概観する。

発掘調査された集落跡には、築館地区佐内屋敷遺跡（宮城県教委：1983）、原田遺跡（宮城県教委：1980、2005）、嘉倉貝塚（築館町教委：2002、2003、宮城県教委：2003）、鰐沢遺跡（築館町教委：2005）、下萩沢遺跡（宮城県教委：2005）、志波姫地区御胸堂遺跡（宮城県教委：1982）、宇南遺跡（宮城県教委：1980）、大門遺跡（宮城県教委：1980）、糠塚遺跡（宮城県教委：1978）、佐野遺跡（宮城県教委：1980）、栗駒地区長者原遺跡（栗駒町教委：1995）などがある。このうち、糠塚遺跡は東方 5 km にあり、住居跡出土土器は県北地域の国分寺下層式土器の基準資料となっている。南方 2.5 km にある御胸堂遺跡では、奈良・平安時代の遺構・遺物の他に、8 世紀前半頃の関東地方からの人間の移住が想定されるような土器や住居が発見されており、伊治城成立以前の栗原地方の動向を考える上で注目される。南方 4 km にある下萩沢遺跡では伊治城存続期と同時期の掘立柱建物跡、竪穴住居跡が発見された。集落には、溝、木材軸を周囲に巡らせていた可能性が指摘されるとともに、建物の方向を揃えて計画的に配置された建物跡群がみられ、他の集落とは異なる様相を示していることから、伊治城との関わりが考えられる。

生産遺跡では、西方 4 km の築館地区にある須恵器を焼いた岩ノ沢窯跡や東方 4 km の志波姫地区にある須恵器を焼いた狐塚遺跡、北方 6 km の金成地区にある須恵器や瓦を焼いた小迫神社窯跡があげられ、製品が伊治城に供給されていた可能性が考えられる。

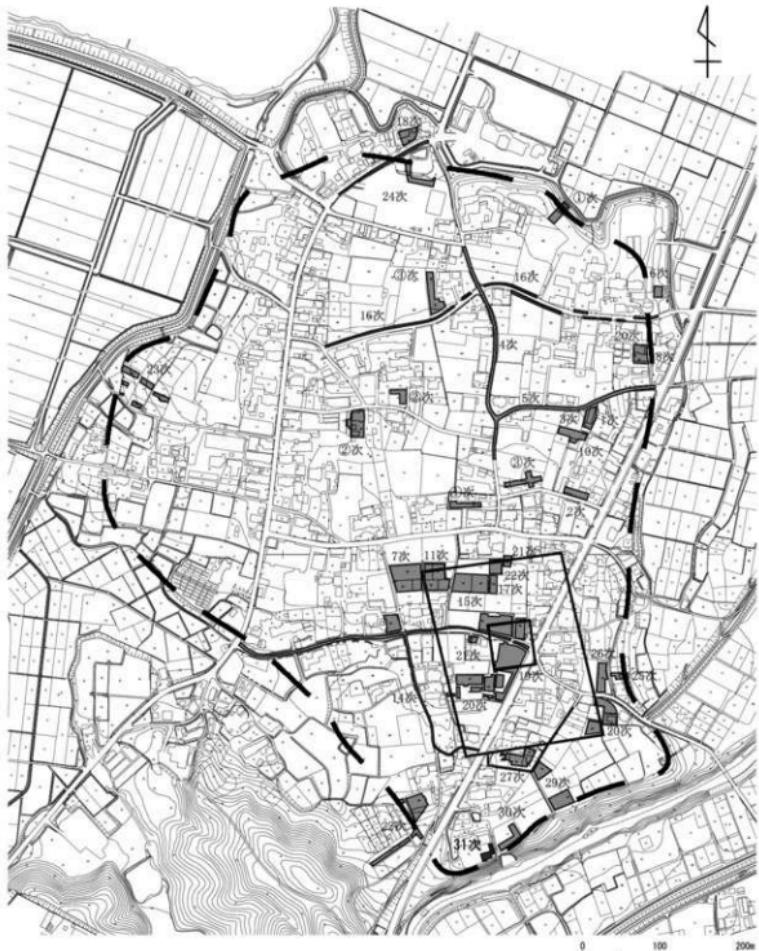
北方約 6 km の栗駒地区的丘陵上には、銅帶金具などが発見された、33 基の小円墳からなる鳥矢ヶ崎古墳群がある（東北学院大学考古研：1972）。また、北約 2 km 築館地区には大沢横穴墓群、金成地区には姉歎横穴墓群があり、伊治城を含む周辺一帯の支配層の墓と考えられる。北方 3 km の栗駒地区には『吾妻鏡』に登場する栗原寺跡と推定されている地点があり、古代末の遺構や出土遺物は未確認な

がらも、10世紀前半頃の池跡（宮城県教委：1996）や平安時代中期以降の礎石建物跡（栗原寺調査団：1963）が発見されており、付近からは仏像が見つかっている。



| No. | 遺跡名 | 種別 | 時代 | No. | 遺跡名 | 種別 | 時代 | No. | 遺跡名 | 種別 | 時代 |
|-----|--------|-----|-------------|-----|--------|-----|-----------|-----|--------|--------|-------------|
| 1 | 伊治城跡 | 城柵 | 礎石・古墳・奈良・平安 | 13 | 高山田遺跡 | 散布地 | 圓文・古代 | 25 | 稚保遺跡 | 集落 | 傳生・奈良・平安 |
| 2 | 栗原寺 | 寺院 | 古代・中世 | 14 | 原田遺跡 | 集落 | 圓文中・古代 | 26 | 大門遺跡 | 集落 | 圓文・奈良・平安・中世 |
| 3 | 尾松遺跡 | 散布地 | 古代 | 15 | 下秋沢遺跡 | 集落 | 圓文・古代 | 27 | 孤塚遺跡 | 宮跡 | 古代 |
| 4 | 長者野遺跡 | 集落 | 古墳前・中・古代 | 16 | 源光遺跡 | 散布地 | 圓文・古代 | 28 | 熊谷遺跡 | 集落 | 圓文・古代 |
| 5 | 泉沢八遺跡 | 集落 | 古代 | 17 | 内舟敷遺跡 | 集落 | 圓文・奈良・平安 | 29 | 鶴ノ丸船遺跡 | 集落・船跡 | 圓文晩・奈生・近世 |
| 6 | 大仏山古墳群 | 円墳 | 古墳後・古代 | 18 | 木戸遺跡 | 集落 | 圓文中・古代 | 30 | 吹付遺跡 | 集落 | 古代 |
| 7 | 姉衝横穴墓群 | 横穴墓 | 古墳後 | 19 | 舩沢遺跡 | 集落 | 圓文後・古代・中世 | 31 | 宇南遺跡 | 集落・船跡 | 圓文後・後・奈生・近世 |
| 8 | 佐野遺跡 | 集落 | 弥生・古代 | 20 | 照鏡台遺跡 | 散布地 | 圓文・古墳・古代 | 32 | 銅駒山遺跡 | 集落 | 圓文・近世 |
| 9 | 大沢横穴墓群 | 横穴墓 | 古墳後・古代 | 21 | 玉手山遺跡 | 散布地 | 圓文中・晚・古代 | 33 | 山ノ上遺跡 | 集落 | 圓文・古代 |
| 10 | 堀切長根遺跡 | 散布地 | 圓文・古代 | 22 | 藤倉貝塚 | 集落 | 圓文前・弥生・古代 | 34 | 淀遺跡 | 散布地・集落 | 圓文・古墳・古代・中世 |
| 11 | 基内屋敷遺跡 | 散布地 | 圓文・古代 | 23 | 刈穂治部遺跡 | 散布地 | 圓文中・晚・古代 | 35 | 大天馬遺跡 | 散布地 | 古代 |
| 12 | 浦ノ沢遺跡 | 散布地 | 古代 | 24 | 刈穂袋遺跡 | 散布地 | 圓文・古代 | 36 | 堂の沢遺跡 | 散布地 | 古代 |

第2図 伊治城と周辺の遺跡



第3図 調査区と周辺の地形

IV. 調査の目的 (第3図)

伊治城の発掘調査は政府の検出を主眼に実施されてきたが、平成3・4年度の調査で政府の規模や建物配置がほぼ解明されたため、平成5年度以降は内郭と外郭の区画施設及び両地区的官衛ブロックの構造と変遷の把握を目的に調査を実施してきた。平成15年度からは、台地縁辺部に想定される外郭南辺区画施設の解明を目的に実施した。外郭南辺区画施設が予想される場所から建物を検出し、周辺の土坑から築地塀の崩壊土とおもわれる土塊を発見している。平成16年度はこれらの成果をうけて、調査区を前年度の西側に設定し、外郭南辺区画施設の検出を目的に調査を実施した。その結果、外郭南辺区画施設本体を発見することはできなかったが、外郭南門と櫓、整地層、土取り溝を発見し、これらの関係から3時期の変遷を確認することができた。今年度は、比較的削平を受けていないとおもわれる昨年度の調査区の西隣接地において、引き続き外郭南辺区画施設の検出を目的に調査を実施した。

V. 基本層序

本調査区内での基本層序は以下のとおりである。

I 層：表土 調査区全体に分布する。

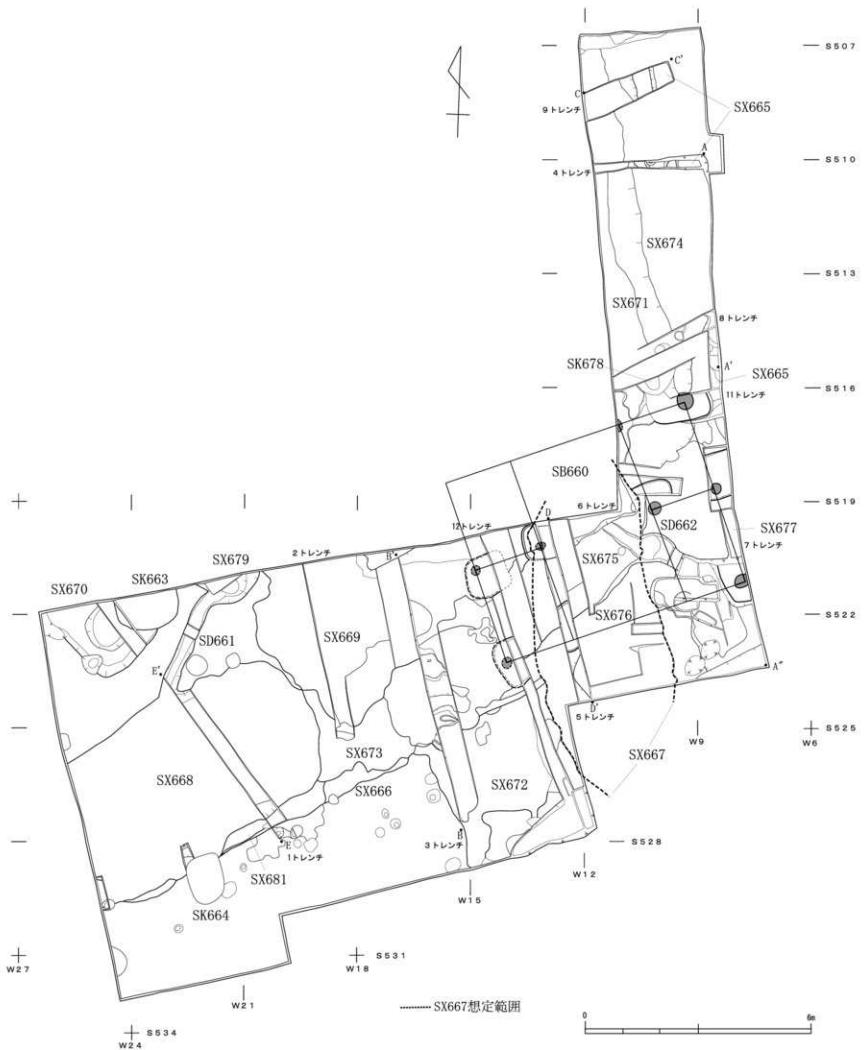
II 層：暗褐色シルト（10YR 3/4）調査区西部北側に分布する。古代の遺構を覆っている。

III 層：明黄褐色土シルト（10YR 6/8）で地山面。

VI. 検出した遺構と遺物

今回の調査で検出した主な遺構は、掘立柱建物跡1棟、整地7、土取りによる溝状遺構2、土取り穴5、土坑3基、溝跡2条などである。遺物については、各遺構や表土から土師器、須恵器、円面鏡、平瓦、石器などの破片が整理用コンテナで5箱出土している。これらの遺物に関しては来年度も同位置を含む周辺を調査するので、次回の報告書に記載する。

以下、掘立柱建物、整地、土取りによる溝状遺構、土取り穴について説明し、それ以外の溝跡、土坑については一覧表で記すこととする。（表1・2）



第4図 第31次調査区

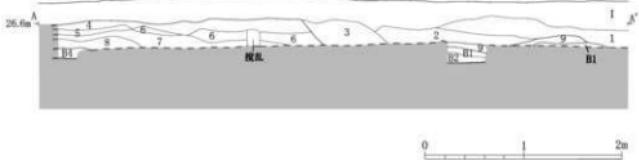
1 挖立柱建物跡

【SB660】(第5図)

調査区中央から東側の地山面およびSX665・666土取りによる溝状遺構の堆積土上面で検出した。桁行3間、梁行2間の東西棟総柱の建物跡と考えられ、一部調査区外に延びる。SD662溝跡、SX667・669土取り穴・SX675・676・677整地より古く、SX665・666土取りによる溝状遺構より新しい。東側柱列で検出した柱以外は、上層からの円形の落ち込みが建物の柱筋にそろうことから、柱の位置と判断した。柱穴は8箇所で検出し、そのうち2箇所で柱痕跡、1箇所で柱抜取穴を確認している。



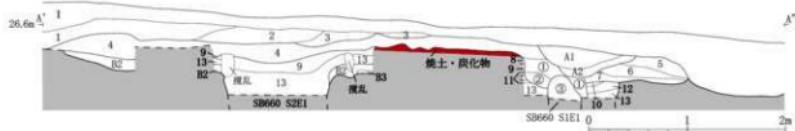
第5図 SB660 建物跡



東壁北部

| No. | 土 色 | 土 性 | 特 殻 | 備 考 |
|-----|----------------|--------|---|-----------|
| 1 | 褐色 10YR4/4 | シルト | 10mm程度までの焼土粒、3mm程度の炭化物を若干含む、地山土粒を少量含む | 崩壊土 |
| 2 | 褐色 10YR4/4 | シルト | 10mm程度の地山粘土ブロック、10mm程度の焼土ブロック、5mm程度の炭化物をまばらに含む | 崩壊土 |
| 3 | 黄褐色 10YR5/8 | シルト | 白色土、褐色土ブロックを含む | 崩壊土 |
| 4 | 暗褐色 10YR3/4 | 粘土 | 地山粘土ブロックを多量に含む、5mm程度の炭化物をまばらに含む | |
| 5 | 明黃褐色 10YR6/8 | 粘土 | 暗褐色土、白色粘土を多量に含み、3mm程度の炭化物を多く含む 10mm程度の地山土ブロックをごく少含む | SX674整地 |
| 6 | 明黃褐色 10YR6/6 | 粘土質シルト | 10~30mmの白色粘土ブロック、10mm程度までの地山粘土ブロックを含む | |
| 7 | 暗褐色 10YR3/4 | 粘土 | 地山粘土ブロックを多量に含み、3~5mmの炭化物を多く含む | |
| 8 | 明黃褐色 10YR6/8 | 粘土 | 暗褐色土、白色粘土を多量に含み、部分的に網状に含む 3mm程度の炭化物をまばらに含む | |
| 9 | 褐色 10YR4/4 | 粘土質シルト | 地山粘土ブロックを多量に含み、10mm程度の焼土ブロック、2mm程度の炭化物をまばらに含む | |
| B1 | 褐色 10YR4/4 | 粘土質シルト | 3~5mmの炭化物を多量に含み、3mm程度までの焼土粒を多く含む 地山土粒をまばらに含む、酸化鉄を含む | SX665自然堆積 |
| B2 | にぶい黄褐色 10YR4/3 | 粘土質シルト | 2~3mmの炭化物をまばらに含み、酸化鉄を含む | |
| B3 | 暗褐色 10YR3/3 | 粘土質シルト | 3mm程度の炭化物をまばらに含み、酸化鉄を含む | |

第6図 調査区東壁北側



東壁南部

| No. | 土 色 | 土 性 | 特 殻 | 備 考 |
|-----|----------------|--------|--|-------------|
| A1 | 褐色 10YR4/4 | シルト | 1~3mmの焼土粒をまばらに含み、1~5mmの炭化物を若干含む 10mm程度の地山粘土ブロックを少く含む | SX662自然堆積 |
| A2 | にぶい黄褐色 10YR5/4 | シルト | ごく少量の炭化物粒を含む | |
| ① | 黄褐色 10YR5/6 | 粘土質シルト | 10mm程度の地山粘土ブロックを多く含み、3mm程度の炭化物を含む 10mm程度の焼土ブロックをごく少量含む | |
| ② | 黄褐色 10YR5/6 | 粘土 | 5mm程度の地山粘土ブロック、5~10mmの焼土ブロック、5~10mmの炭化物を多量に含む | |
| ③ | 褐色 10YR4/4 | シルト | 焼土ブロック、炭化物を多く含む | S660 SIE1柱刺 |
| 1 | 第6回のB1に対応する | | | 崩壊土 |
| 2 | 褐色 10YR4/4 | シルト | 10mm程度までの焼土粒、3mm程度の炭化物を含み、地山土粒を少量含む | 崩壊土 |
| 3 | 褐色 10YR4/4 | シルト | 地山粘土ブロック、白色粘土ブロックを含む | |
| 4 | 黄褐色 10YR5/6 | シルト | 10~20mmの地山粘土ブロックを含む 地山土、炭化物を含む | SX674整地 |
| 5 | にぶい黄褐色 10YR5/4 | 粘土質シルト | 地山粘土ブロックを含み、3mm程度の炭化物を少量含む | |
| 6 | にぶい黄褐色 10YR5/4 | シルト | 地山粘土ブロック、白色粘土ブロックを含む | SX676整地 |
| 7 | にぶい黄褐色 10YR5/4 | シルト | 5mm程度の地山粘土ブロックを多く含む | |
| 8 | 褐色 7.5YR4/6 | シルト | 地山土と炭化物を多量に含む | |
| 9 | 明黃褐色 10YR5/4 | シルト | 白色粘土ブロックを多く含み 5mmの炭化物を含む 層上部は熱の影響で赤色硬化している | |
| 10 | 暗褐色 10YR3/4 | 粘土質シルト | 5~10mmの地山粘土ブロックを多く含む | SX677整地 |
| 11 | 暗褐色 10YR3/4 | シルト | 灰白色土と地山粘土ブロックを多く含む部分が互交に堆積している | |
| 12 | にぶい黄褐色 10YR6/4 | 粘土 | 5~10mmの地山粘土ブロックを多く含み、5mm 程度の炭化物を集中的に含む | |
| 13 | 暗褐色 10YR3/4 | 粘土 | 地山粘土ブロックを多量に含む | |
| B1 | 第6回のB1に対応する | | | |
| B2 | 第6回のB2に対応する | | | SX665自然堆積 |
| B3 | 暗褐色 10YR2/3 | シルト | 地山粘土ブロックを多く含む | |

第7図 調査区東壁南側

平面規模は桁行が棟通下柱列で長総6.7m、柱間寸法が西側から1.8m、3.2m、1.7mである。梁行が東側柱列で長総5.1m、柱間寸法が南から2.6m、2.5mである。方向は東側柱列で測るとN-22°Wである。柱穴は一辺1.1~1.3mの隅丸方形で深さは断ち割りを行っていないので不明である。埋土は炭化物を含む暗褐色シルトである。柱痕跡は径0.3mで、焼土粒や炭化物粒を多く含む。柱抜取穴は、多量の焼土及び炭化物を含む。

SB660建物跡の柱抜取穴や建物跡の周囲から多量の焼土および炭化物、焼けた土壁の破片を検出していることから、建物は火災により焼失していると考えられる。

〔出土遺物〕柱穴の埋土から土師器の小破片、須恵器甕の小破片が少量出土している。柱痕跡から須恵器甕の口縁部の破片が出土している。

2 整 地

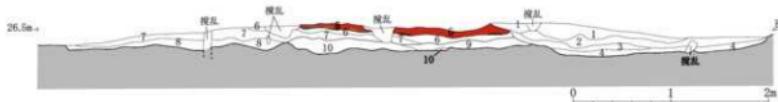
SX660建物跡の火災より新しいSX673・674・675・676整地と、火災より古いSB660建物跡に伴うSX672・677整地を確認している。

【SX672】(第8図)

調査区中央南側の地山面で検出した。SX673・676整地より古く、SX666土取りによる溝状構造より新しい。範囲は東西3.0m以上、南北4.6m以上、厚さ0.05~0.2mで南側は削平を受け浅くなり、底面は凹凸がある。平面形は不明である。整地は3層に分けられ(第8図: 8~10)、1層は地山粘土ブロックを多く含み、炭化物をまばらに含む褐色シルト。2層は地山ブロックを多く含み、炭化物をまばらに含む褐色のシルト。3層は地山ブロックを多く含み、炭化物をまばらに含むにぶい黄褐色の粘土質シルトである。

北側は焼土に覆われており、整地上面の一部は熱により赤色硬化していることから、SB660建物跡が焼失した時の機能面で、建物と同時期の構造であると考えられる。

〔出土遺物〕遺構確認面から、土師器の小破片が少量出土している。



第3トレーン

| % | 土 色 | 土 性 | 特 殖 | 備 考 |
|----|----------------|--------|---|-----------|
| 1 | 褐色 10YR4/4 | シルト | 5~10mmの焼土ブロック、3~10mmの炭化物をまばらに含む | SX669自然堆積 |
| 2 | にぶい黄褐色 10YR5/4 | シルト | 10mm程の地山粘土ブロックを認めない 5~10mmの焼土ブロックおよび炭化物をまばらに含む 炭化物を含む | |
| 3 | 褐色 10YR4/4 | 粘土質シルト | 3~20mmの焼土ブロックを含み、部分的に集中して含む 5~10mmの炭化物を多く含む | |
| 4 | 暗褐色 10YR3/4 | 粘土 | 3mm程度の炭化物をごく少量含む | |
| 5 | 褐色 7.5YR4/6 | シルト | 多量の焼土および炭化物を含む 焼土塊と炭化物が混ざれ、熱によって白化したと思われる部分有り | |
| 6 | 褐色 10YR4/4 | シルト | 10~30mmの地山粘土ブロックを多く含み、1~3mmの炭化物をまばらに含む | |
| 7 | にぶい黄褐色 10YR5/4 | 粘土質シルト | 3~5mmの炭化物、白色砂、焼土块を含み、5~10mmの地山粘土ブロックをまばらに含む | SX672整地 |
| 8 | にぶい黄褐色 10YR5/4 | 粘土質シルト | 3~5mmの炭化物、白色砂、焼土块を含む、5~10mmの地山粘土ブロックを含む | |
| 9 | にぶい黄褐色 10YR5/4 | 粘土質シルト | 5~10mmの地山粘土ブロックをまばらに含み、炭化物をごく少量含む | |
| 10 | 暗褐色 10YR2/3 | 粘土質シルト | 10~30mmの地山粘土ブロックを多量に含み、3mm程度の炭化物をごく少量含む | SX666自然堆積 |

第8図 SX672 整地、SX669 土取り穴

【SX673】(第4図)

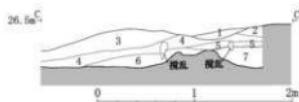
調査区中央のSX666土取りによる溝状遺構上面で検出した。SX668・669土取り穴より古く、SX666溝状遺構、SX672・681整地より新しい。範囲は東西2.2m以上、南北2.0m以上である。SX668・669土取り穴に掘り込まれている。平面での確認のみで精査は行っていない。調査区中央部で検出している焼け面および焼土ブロックを多く含む範囲を一部直接覆っている。このことから火災の直後に行われた整地と考えられる。

〔出土遺物〕 遺構確認面から、須恵器坏の小破片が少量出土している。

【SX674】(第9図)

調査区北東部で検出した。調査区の南北方向に延びる。SX671土取り穴、SK678土坑より古く、SX665土取りによる溝状遺構より新しい。範囲は東西1.2m以上、南北8m以上、厚さ0.1~0.4mで、底面は凹凸がある。整地は地山粘土ブロックを主体とし、焼土及び炭化物を含む層と暗褐色土または褐色土に焼土、炭化物を含む層に大別される。4・9トレンチでその堆積が確認されており、一部で黒色土と黄褐色土が互層となっている状況を確認している。平面形はほぼ南北方向に続く整地である。層中に焼土を含むことから火災後の整地であると考えられる。

〔出土遺物〕 須恵器坏の口縁部の破片が少量出土している。



第9トレンチ

| No. | 土 色 | 土 性 | 特 徴 | 備 考 |
|-----|-------------|--------|---|-----------|
| 1 | 褐色10YR4/4 | シルト | 地山粘土粒、3mm程度の炭化物をまばらに含む | |
| 2 | 明黄褐色10YR6/8 | 粘土 | 細弱化土を多く含み、白色粘土を含む 3mm程度の炭化物をまばらに含み、焼土粒をこぐわすかに含む | |
| 3 | 明黄褐色10YR6/8 | 粘土 | 細弱化土を多く含み、3~20mmの炭化物をまばらに含む | |
| 4 | 褐色10YR4/4 | シルト | 2mm程度の焼土粒、2~3mmの炭化物粒を含み、白色砂を含む 10mm程度までの地山粘土ブロックをまばらに含む 西側にならば地山粘土ブロックがおぼらになり、土色2mくなる | SX674整地 |
| 5 | 明黄褐色10YR6/8 | 粘土 | 細弱化土を多く含み、白色粘土を含む 3mm程度の炭化物をまばらに含み、焼土粒をこぐわすかに含む | |
| 6 | 暗褐色10YR3/3 | 粘土質シルト | 30mm程度までの地山粘土ブロックを多量に含み、3mm程度の炭化物を少量含む | |
| 7 | 暗褐色10YR3/3 | 粘土質シルト | 3mm程度の炭化物をまばらに含む | SX675自然堆積 |

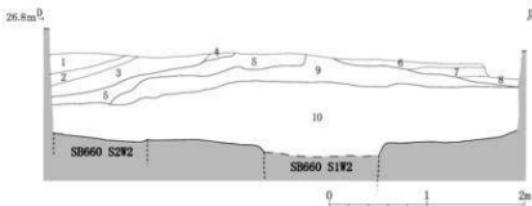
第9図 SX665 土取りによる溝状遺構、SX674 整地

【SX675】(第10図)

調査区中央のSX667土取り穴上面で検出した。SD662溝跡、SX669土取り穴、SX674・676整地より古く、SB660建物跡、SX667土取り穴より新しい。範囲は東西3.0m以上、南北4.1m、厚さ0.1~0.3mである。平面形は東西方向に続く整地である。5トレンチ断面で観察すると、北側は平坦に整地されており、南側は緩やかに傾斜している。整地層は地山粘土ブロック、炭化物を多く含み、焼土ブロックを含む褐色の粘土である。

火災直後に掘られたSX667土取り穴より新しいことから、火災後の整地である。

〔出土遺物〕 須恵器坏・甕の小破片が少量出土している。



第5・10トレンチ

| No. | 土色 | 土性 | 特徴 | 備考 |
|-----|----------------|--------|---|-------------|
| 1 | 褐色 10YR4/4 | シルト | 2mm程度の炭化物をごく少量含む | |
| 2 | 暗褐色 10YR3/3 | シルト | 灰白色火山灰を含む | SX669自然堆積 |
| 3 | にぶい黄褐色 10YR5/4 | シルト | 白色砂粒、5mm程度の炭化物、鐵化鉄を含む | |
| 4 | にぶい黄褐色 10YR5/4 | 粘土質シルト | 暗褐色土および地山粘土を多量に含む | |
| 5 | 褐色 10YR4/4 | 粘土質シルト | 5mm程度の炭化物を多く含み、5~10mmの燒土粒を含む 10mm程度の地山粘土ブロックをまばらに含む | 崩壊土 |
| 6 | 褐色 10YR4/6 | 粘土質シルト | 地山粘土ブロック、20mm程度までの焼土ブロックを多量に含み、10mm程度までの炭化物を多く含む | |
| 7 | にぶい黄褐色 10YR5/3 | 粘土質シルト | 20mm程度までの地山粘土ブロックを若干含む | SX675整地 |
| 8 | にぶい黄褐色 10YR5/3 | 粘土 | 地山粘土を多量に含み、5mm程度の炭化物を少額含む | |
| 9 | 褐色 10YR4/4 | 粘土 | 30mm程度の地山粘土ブロックを多量に含み、5mm程度の炭化物を多く含む 5~10mmの焼土ブロックをまばらに含む | SX675整地 |
| 10 | にぶい黄褐色 10YR4/3 | 粘土 | 上部 30mm程度までの焼土ブロックを多量に含み、白色粘土ブロック、10mm程度までの炭化物を多く含む 下部 地山粘土、褐色土を多量に含む 燃土ブロック、5mm程度の炭化物をまばらに含む 鐵化鉄を含む | SX667 人為的堆土 |

第10図 SX675・SX676 整地、SX667・SX669 土取り穴

【S X 6 7 6】(第10図)

調査区中央SX675整地上面で検出した。SD662溝跡より古く、SB660建物跡、SX667土取り穴、SX675整地より新しい。範囲は東西4m以上、南北10m以上、厚さ0.2m以上である。平面形は不整形である。整地は3層に分けられ(第10図: 6~8)、1層は地山粘土ブロック、焼土ブロック、炭化物を多く含む褐色の粘土質シルト、2層は地山粘土ブロックを若干含むにぶい黄褐色の粘土質シルト、3層は地山粘土を主体とし、炭化物を少量含むにぶい黄褐色の粘土である。

火災後のSX675整地より新しいことから火災後の整地である。

〔出土遺物〕土師器甕、須恵器壺の小破片が少量出土している。

【S X 6 7 7】(第4図)

調査区東端の7・11トレンチ断面で検出した。SX671土取り穴、SX674整地より古く、SB660建物跡、SX665土取りによる溝状造構より新しい。範囲は東西1.0m以上、南北5.5m以上、厚さ0.05m以上である。平面形はSX674整地に覆われておらず不明である。整地層は地山ブロックを多く含む暗褐色粘土である。SB660建物跡柱穴周辺を覆うとともに柱穴部分では掘方に入り込んでいる。また、整地上面が熱を受け赤色硬化していることから、SB660建物跡に伴う基礎整地であり、建物と同時期のものである。

〔出土遺物〕須恵器甕の小破片が少量出土している。

【S X 6 8 1】(第11図)

調査区南側のSX666土取りによる溝状遺構上面で検出した。SX668土取り穴、SX673整地より古く、SX666土取りによる溝状遺構より新しい。範囲は東西5.5m以上、南北0.5m以上、厚さは0.1～0.14mである。壁は南側で急激に立ち上がり、北側はSX668土取り穴によって掘り込まれているので不明である。方向は南辺で測るとE-30°-Nである。整地層は地山粘土ブロックを多く含み、焼土ブロック・炭化物をわずかに含むにぶい黄褐色の粘土質シルトである。

火災直後のSX673整地が覆われていることから火災前の整地である。

〔出土遺物〕 出土していない。

3 土取りによる溝状遺構

【S X 6 6 5】(第9図)

調査区北東側の4・8・9・11トレーニング断面および平面で一部検出した。SB660建物跡、SX674・677整地より古い。南北方向で確認しており、規模は長さ12m以上、幅0.6m以上、深さ0.2mである。壁は西側で急激に立ち上り、中ほどで緩やかに立上る。底面形は凹凸がある。方向は西辺で測るとN-18°-Wである。堆積土は各トレーニングで細分されるが暗褐色粘土質シルトを主体とする自然堆積である。

焼失したSB660建物跡より古いことから火災前の遺構である。

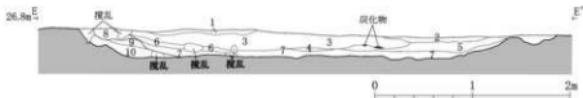
〔出土遺物〕 出土していない。

【S X 6 6 6】(第11図)

調査区西側から中央の地山面で検出した。SB660建物跡、SX667・668土取り穴、SX672・673・675・681整地より古い。規模は長さ12.5m以上、幅3.2m以上、深さは0.35mである。壁は南側が急激に立ち上り、北側はSX668によって掘り込まれているので不明である。底面はやや凹凸がある。方向は南辺で測るとE-30°-Nである。堆積土は2層に分けられ(第11図: 9~10)、1層は地山粘土ブロックを多く含み、炭化物・酸化鉄を含む褐色粘土質シルト。2層は地山粘土ブロックを多く含み、炭化物、酸化鉄を含む暗褐色粘土質シルトでいずれも自然堆積である。

焼失したSB660建物跡より古いことから火災前の遺構である。

〔出土遺物〕 出土していない。



第1トレーナー

| No. | 土色 | 土 性 | 特 質 | 備 考 |
|-----|----------------|--------|--|-----------|
| 1 | 褐色 10YR4/4 | シルト | 10mm程度の地山粘土ブロック、3~5mm程度の炭化物をまばらに含む | |
| 2 | 褐色 7.5YRA/4 | シルト | 灰白色火山灰を含み、50mm程度の暗褐色土ブロックを多く含む 20mm程度の炭化物をまばらに含む | |
| 3 | 褐色 10YR4/4 | シルト | 3~5mmの炭化物をまばらに、10mm程度の炭化物を部分的に集中して含む 炭化鉄を含み、5mm程度の地山粘土粒をまばらに含む | SX668自然堆積 |
| 4 | 褐色 10YR4/4 | シルト | 5~20mmの炭化物ブロックを多く含む | |
| 5 | 褐色 10YR4/4 | シルト | 3~10mmの炭化物を多く含み、層上部で部分的に筋状に含む 焼土粒をまばらに含む 地山粘土ブロックを若干含む | |
| 6 | 暗褐色 10YR3/4 | 粘土質シルト | 3mm程度の炭化物を多く含み、筋状に含む 焼土粒をわずかに含む | |
| 7 | 褐色 10YR4/4 | 粘土質シルト | 5~20mmの炭化物を多量に含み、部分的に筋状に含む | SX681整地 |
| 8 | にぶい黄褐色 10YR5/4 | 粘土質シルト | 地山粘土ブロックを多く含む 3~5mmの炭化物を若干含み、焼土ブロックをわずかに含む | |
| 9 | 褐色 10YR4/4 | 粘土質シルト | 地山粘土ブロックを多く含む 3mmの炭化物をわずかに含む 炭化鉄を含む | SX666自然堆積 |
| 10 | 暗褐色 10YR3/4 | 粘土質シルト | 地山粘土ブロックを多く含み、5mm程度の炭化物を若干含む 炭化鉄を含む | |

第11図 SX666 土取りによる溝状遺構、SX668 土取り穴、SX681 整地

4 土取り穴

【SX667】(第10図)

調査区中央のSX666土取りによる溝状遺構上面で検出した。SD662溝跡、SX669・671土取り穴、SX675・676整地より古く、SB660建物跡、SX666土取りによる溝状遺構より新しい。規模・平面形は東西4m、南北5m以上の楕円形と考えられる。深さは5トレンチで0.8mである。堆積土は、焼土塊及び炭化物を多量に含む、暗褐色粘土である。火災に遭ったSB660のS1W2・S2W2柱穴を壊して掘りこまれていること、埋土に多量の焼土塊及び炭化物含むこと、SX675・676整地に覆われていることから、火災直後に掘られすぐに埋め戻されていると考えられる。

〔出土遺物〕堆積土から焼土塊と頁岩製の剥片1点が出土している。焼土塊には3~5cmのスサが混入していることから、壁材と考えられる。

【SX668】(第11図)

調査区西側の地山面で検出した。SK664土坑より古く、SX666溝状遺構、SX673整地より新しい。SD661溝跡との新旧関係は不明である。規模・平面形は東西6.5m以上、南北4.3m、深さ0.3mでさらに西側に延び、隅丸長方形をしていると考えられる。底面はほぼ平坦で、壁はなだらかに立上る。方向は南辺で測るとE-37°-Nである。堆積土は7層に分けられ(第11図: 1~7)、2層中には灰白色火山灰を確認しており、いずれも自然堆積である。

遺構の重複関係から火災後の土取り穴である。

〔出土遺物〕堆積土から土師器壺・甕の小破片、須恵器壺・甕、黒曜石製の石鎌が出土している。須恵器壺の底部切離し技法は、回転ヘラ切り無調整のものと、ナデ調整のものがあり、内外面に火ダスキの痕跡があるものもある。

【S X 6 6 9】(第9図)

調査区中央北側の地山面で検出した。SB660建物跡、SX673・675整地より新しい。規模・平面形は東西10m、南北4.5m以上、深さ0.35mの不整形で、さらに北側に延びる。底面はやや凹凸があり、壁は南側が急激に立ち上がり、北側の壁は緩やかに立上る。方向は南辺で測るとE-37°-Nである。堆積土は3トレンチでは4層に分けられ（第9図：1～4）、いずれも自然堆積である。

〔出土遺物〕 堆積土から土師器坏・長胴形甕、須恵器坏・甕、砥石、焼け壁塊、頁岩製の剥片が出土している。土師器の坏は、ロクロ調整で底部の切離し技法は不明である。甕は小型の長胴形で、体下部にヘラケズリがされ、底部にナデ調整されている。須恵器坏は、底部の切離し技法が回転ヘラ切り後、ナデ調整されている。甕は外面に平行叩き目、内面に円弧状のあて具痕がある胴部破片と口縁部の破片である。

【S X 6 7 0】(第4図)

調査区西側の地山面で検出した。SK663土坑より古い。規模・平面形は、東西3m以上、南北2.2m以上、深さ0.18mの不整形で、さらに北側に続く。底面はほぼ平坦で中央部で径1mの範囲で窪んでおり、壁は緩やかに立上る。堆積土は3層に分けられ、1層は炭化物を多量に含むにぶい黄褐色の粘土質シルト、2層は炭化物をまばらに含む暗褐色粘土質シルトである。3層は地山ブロックが混じる暗褐色土の粘土質シルト、4層は地山ブロックを多量に含む暗褐色土の粘土である。

〔出土遺物〕 堆積土から、土師器甕、須恵器坏・甕の破片が出土している。坏は、底部の切離し技法が回転ヘラ切り後、ナデ調整されヘラケズリがされている。

【S X 6 7 1】(第9図)

調査区北側のSX674整地上面で検出した。SB660建物跡、SX674・677整地、SK678土坑より新しい。規模・平面形は南北12.5m以上、東西1.4m以上、深さ0.17mでさらに北西側に延びる。平面形は不明である。西側の壁は緩やかに立上る。方向は東辺で測るとN-15°-Wである。堆積土は1層で炭化物及び地山粒を含み、にぶい黄褐色の粘土質シルトの自然堆積である。

〔出土遺物〕 堆積土から、須恵器坏・蓋・甕の破片、黒曜石の剥片が出土している。坏は、底部の切離し技法が回転ヘラ切り後、ナデ調整されている。蓋は上部を回転ヘラケズリがされている。

【S X 6 7 9】(第4図)

調査区西側の地山面で検出した。SD661溝跡と重複しているが新旧関係は不明である。規模・平面形は東西1.4m以上、南北0.7m以上、深さ0.17mで、さらに北側に延びる。平面形は不明である。堆積土は炭化物を多く含む褐色シルトの自然堆積である。

〔出土遺物〕 堆積土から土師器の小破片、須恵器坏の小破片が少量出土している。

5 土坑・溝跡

表1 土坑一覧表（第4図）

| 遺構名 | 形 状 | 規 模 (長軸×短軸) | 重 複 | 備 考 |
|-------|-------|--------------|----------------------------|---------------------------------|
| SK663 | 円形？ | 径1.6m | SX670より新しい | 地山ブロックを多く含み、炭化物粒をまばらに含む暗褐色土 |
| SK664 | 南北長方形 | 1.25m×0.95m | SX668より新しい | 地山ブロックを多く含み、炭化物をまばらに含む暗褐色粘土質シルト |
| SK678 | 梢円形？ | 1.0m×0.45m以上 | SX671・674より古く SB660より古い | 黄灰色粘土質シルト |

表2 溝跡一覧表（第4図）

| 遺構名 | 方 向 | 規 模 (長さ×幅) | 重 複 | 備 考 |
|-------|---------|------------------------------|----------------------------|---|
| SD661 | N-25°-E | 長さ2.6m以上× 幅40cm×深さ6cm | SK668、SX679と重複 し新旧関係は不明 | 炭化物を多く含む褐色土 |
| SD662 | W-20°-N | 長さ4.5m以上× 幅45~60cm×深さ40cm | SB660、SX676・675 よりも新しい | 上層は焼土粒、炭化物を含む褐色土で、下層は 炭化物粒をごく少量含むにぶい黄褐色土 |

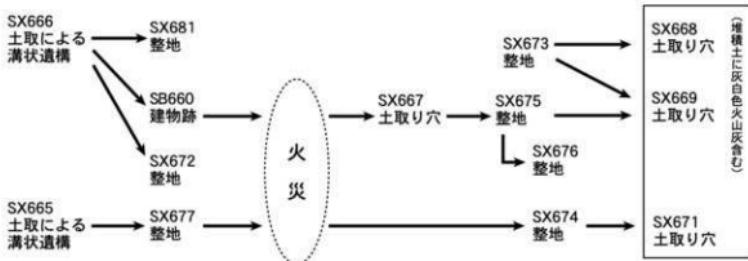
VII. 考察

今年度の調査は、昨年度に引き続き台地南縁辺部に想定される外郭南辺区画施設本体の検出とその規模・構造・年代の解明を目的として実施した。調査では南辺区画施設の築地盤本体を検出することはできなかったが、SB660建物跡とこれにともなうSX672・677整地、SX665・666土取りによる溝状造構、区画施設にともなうと考えられるSX668・669・671土取り穴を発見することができた。以下、これらの遺構について、その変遷・年代について検討する。

1. 遺構期の変遷と各遺構の特徴

(1) 遺構の変遷

確認した主な遺構については、重複関係により次のような変遷が認められた。

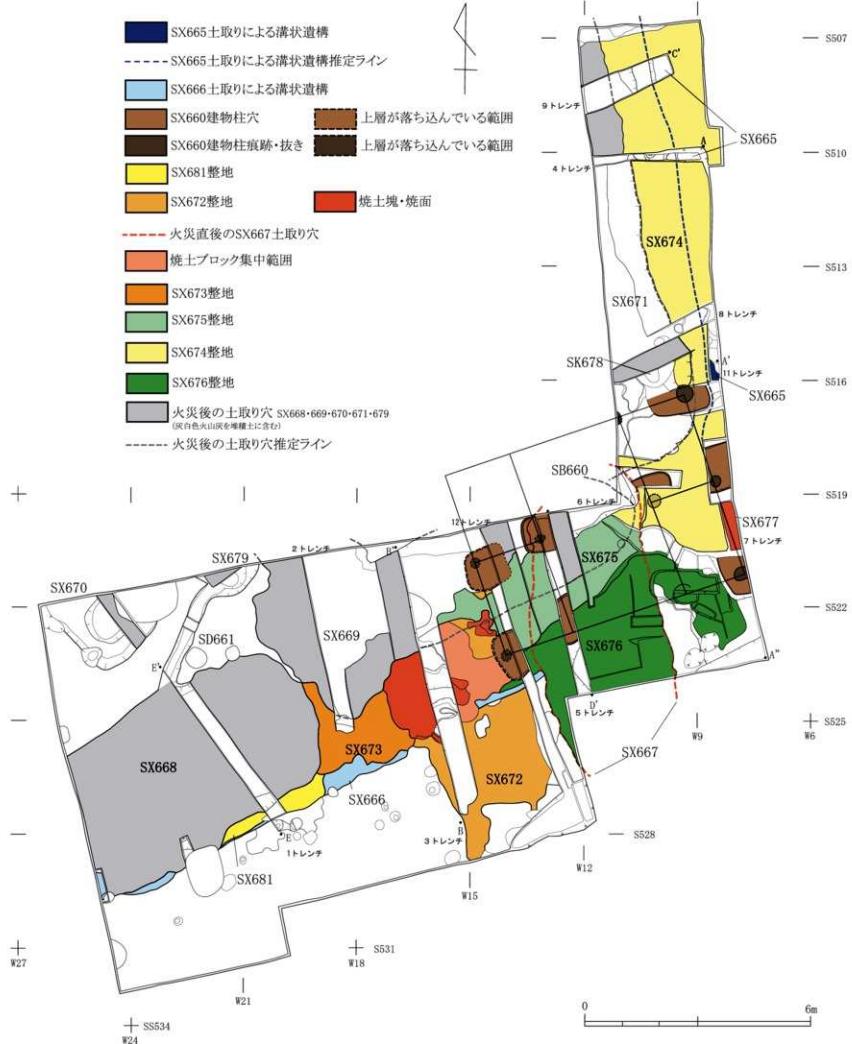


(2) 各遺構の特徴

① SB660 外郭南門跡とSX672・SX677 整地及び火災直後の土取り整地について

SB660建物跡は、一部調査区外に展開する桁行3間、梁行2間の東西棟総柱建物跡である。火災により焼失している。桁行中央間が広いこと、(柱穴の規模が一辺1.1~1.3mを超えるもので、これまで確認しているSB610外郭南門跡または檐跡（築館町教委:2004）、SB640外郭南門跡（築館町教委:2005）に匹敵すること)、外郭南辺区画施設が想定される位置にあることから伊治城の外郭南門跡の可能性が高いと考えられる。

SB660建物跡の周辺部で確認したSX672整地は南西隅柱穴を覆う状況を確認しており、上面にはSB660建物跡の焼失の際の焼土塊が堆積している。3トレンチ付近ではSX666を掘り込んでいる。また、南側では地山を掘り込んだあとに整地を行っている。SX677整地は、SX665土取りによる溝状造構の自然堆積層上にみられた整地地業である。SX665が埋没した後に行われたと考えられる。SB660建物の柱穴掘り方内にSX677整地層が覆っていること、整地の上面に強い熱を受けた焼土塊が崩落しており、SB660建物が焼失した時に機能していた面と捉えることができる。このことなどから、SX672整地及びSX677整地はSB660建物を構築する際に行われた整地であると考えられる。また、SX672・677整地の上面に厚く堆積している焼土塊は、SB660建物跡の東西両側柱列の外側に位



第12図

置している。焼土塊にはスガが混入していることから壁材であるものと思われ、SB660建物跡は壁を伴う建物だったと考えられる。

SX660建物跡が焼失した後、柱は抜取または切取られていると考えられる。建物中央付近にSX667土取り穴が掘り込まれ、短期間のうちに埋め戻されている状況を確認できた。また、SX673・SX674・675整地は焼土やSX667土取り穴を直接覆っている。このことから、これらの遺構はSB660建物跡の火災痕跡を覆うことを目的としたもので、火災後短期間のうちに行われた一連の作業であったと捉えることができる。なお、SX676整地も同様に一連の工程の中で行われた可能性があるので、今後の調査で再度検討したいと考えている。

② 土取り穴について

SX668・669・671土取り穴は、火災後の整地よりも新しい土取り穴である。SX668・669は連続し東西方向に延びる。SX671はSX669の東端で折れ曲がるように北方向に続く。これらは楕円形または不整形の土坑を連続的に掘削したもので、区画施設構築に伴う土取りのための土坑と考えられる。堆積土の中に灰白色火山灰が含まれること、小片ではあるがロクロ土師器坏が出土していることから、古代のものでおおよそ9世紀代から10世紀前半までの間に埋没したものと考えられる。

SX669土取り穴南辺では部分的ではあるがSX675整地が犬走り状の平坦面と、壁が垂直に立ち上がる状況を確認している(第10図:層№5と№9の間部分)。このことは、連続する土取り穴の南側に区画施設本体の存在の想定が可能である。土取り穴と整地の関係については、SX671土取り穴とSX674整地も同様の状況を想定できるので、今後の調査で再度検討を行いたいと考えている。

SX668・669土取り穴は、SX666土取りによる溝状遺構より7° 東で北に偏し、SX671土取り穴は、SX665土取りによる溝状遺構より3° 北で東に偏しており、火災後のSX674整地とほぼ方向が同じであるので、連続的に区画施設が存在した可能性も考えられる。また、SX671の延長線上にあたる調査区の北側には現在でも南北方向に農業用のため池があり、さらに北側に延長すると内郭西辺にあたることから、この区画がさらに北側に延びる可能性がある。今後の調査で確認していきたい。

③ 土取りによる溝状遺構について

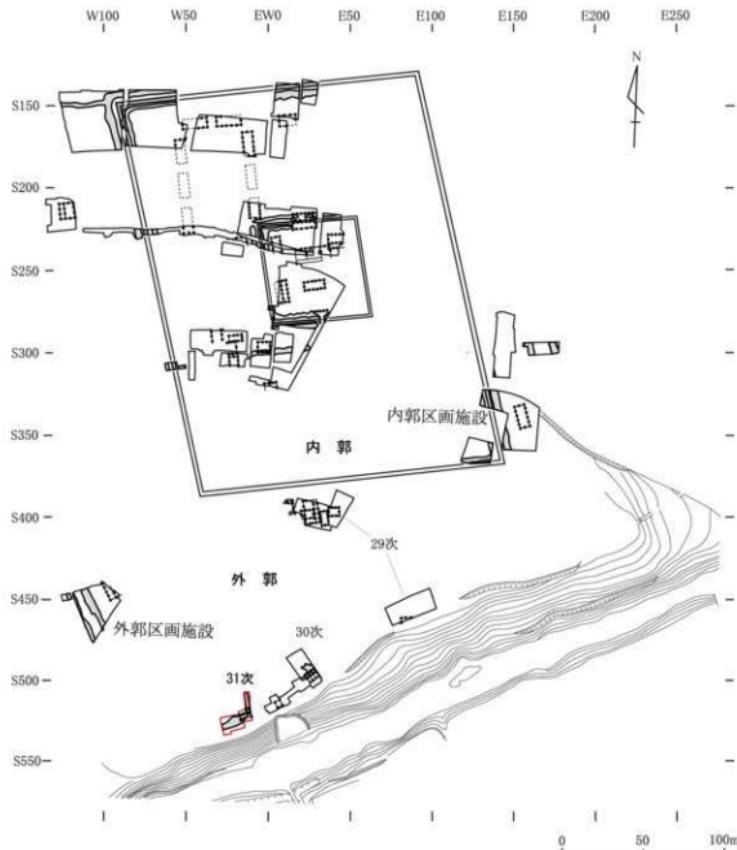
SX665・666土取りによる溝状遺構は、今回検出した重複関係のある遺構の中で最も古い遺構である。しかし、時代を特定できる遺物は検出していないが、台地縁辺部の地形に沿っていることや新しい段階の土取り穴と方向がほぼ同一なことから、伊治城が存続していた時期のものと考えられる。

SX665土取りによる溝状遺構は、南北方向にのびるがトレーンの断面等で確認されたものである。詳細は不明であるが火災後に整地されるSX674とほぼ同一の方向をとることから、今後の調査によってこれらの変遷について検討していきたい。SX666土取りによる溝状遺構は、南側が直線的に掘り込まれ、台地の南縁辺にほぼ平行して東西方向に延びる。北側はSX668・669土取り穴によって掘り込まれているので不明である。

これまで確認されている区画施設に伴う土取り溝では、区画施設本体が想定される方の辺が直線的に掘り込まれており(注1)、政府では築地塀の基壇部分が確認されている。また内郭では築地塀ある

いは土塁があったと想定されている。これらと同様にSX666の南辺は直線的に掘り込まれていることやSX666の南側には遺構等がほとんどないことから、この部分に区画施設本体があった可能性が考えられる。しかし、調査区の中央から南側に向かってやや傾斜していることや地表から遺構面及び地山面までが浅いことから、後世の削平によって、今回の調査では区画施設本体の痕跡を確認することはできなかったものと考えられる。

(注1) SD103内郭北西隅の外側の溝跡（築館町教委：1989）、SD132内郭北西隅の内側の溝跡（築館町教委：1990）、SD226政府北辺の内側の溝跡・SD227政府北西隅の内側の溝跡・SD228・229政府北辺外側の溝跡・SD230政府西辺の外側の溝跡（築館町教委：1992）、SD282政府南辺の内側の溝跡・SD284政府南辺の外側の溝跡（築館町教委：1993）、SD330内郭南東隅の内側の溝跡・SD331内郭南東隅の外側の溝跡（築館町教委：1994）。



第13図 伊治城跡遺構配置模式図

VIII. 調査のまとめと課題

- 1 今回の調査（第31次）では、掘立柱建物跡1棟、土取りによる溝状遺構2、整地7、土取り穴5、土坑3基、溝跡2条などを検出している。
- 2 調査の目的である第29・30次調査の成果により想定される外郭南辺区画施設を確認することはできなかったが、区画施設に伴う土取り遺構を確認することができた。
- 3 新しい段階の土取り遺構は、長軸8mほどの楕円形から不整形に土坑を連続して掘り込むもので、調査区の中央から西側にのびる。また、南北方向にのびることを確認した。この土取り穴と同一方向にのび、検出した遺構のうち最も古い段階のSX665・666土取りによる溝状遺構も確認している。これらについても、さらに北側に延びるのか今後の調査で確認していきたい。
- 4 枢行3間、梁行2間の東西棟の総柱掘立柱建物跡を検出した。平面で確認した構造から外郭南門跡と考えられ、火災によって焼失している。精査を行っていないので、詳細を確認することはできなかった。
- 5 南北方向に続くSX674整地地業の一部に築地塀または土塁とおもわれる版築状の黄色土と黒色土による積土を検出したが、今回の調査では詳細を確認することはできなかつたとともに、この整地と土取り穴の北側の延長が内郭西辺にあたることから、内郭まで延長するのか確認する必要がある。
- 6 今回の調査結果を基に今後の検討課題とし、次年度もSB660建物跡の周辺を再度調査し、調査区内の遺構の変遷について再検討するとともに、台地縁辺部でこれまで発見された建物と各遺構の関係と時期的な関係について確認する。

伊治城跡発掘調査報告書一覧

- (1) 宮城県多賀城跡調査研究所1978『伊治城跡Ⅰ－昭和52年度発掘調査報告書－』多賀城関連遺跡発掘調査報告書第3冊
(2) 宮城県多賀城跡調査研究所1979『伊治城跡Ⅱ－昭和53年度発掘調査報告書－』多賀城関連遺跡発掘調査報告書第4冊
(3) 宮城県多賀城跡調査研究所1980『伊治城跡Ⅲ－昭和54年度発掘調査報告書－』多賀城関連遺跡発掘調査報告書第5冊
(4) 築館町教育委員会1988『伊治城跡－昭和62年度発掘調査概報－』築館町文化財調査報告書第1集
(5) 築館町教育委員会1989『伊治城跡－昭和63年度発掘調査概報－』築館町文化財調査報告書第2集
(6) 築館町教育委員会1990『伊治城跡－平成元年度発掘調査概報－』築館町文化財調査報告書第3集
(7) 築館町教育委員会1991『伊治城跡－平成2年度発掘調査概報－』築館町文化財調査報告書第4集
(8) 築館町教育委員会1992『伊治城跡－平成3年度発掘調査概報－』築館町文化財調査報告書第5集
(9) 築館町教育委員会1993『伊治城跡－平成4年度発掘調査概報－』築館町文化財調査報告書第6集
(10) 築館町教育委員会1994『伊治城跡－平成5年度発掘調査概報－』築館町文化財調査報告書第7集
(11) 築館町教育委員会1995『伊治城跡－平成6年度発掘調査概報－』築館町文化財調査報告書第8集
(12) 築館町教育委員会1996『伊治城跡－平成7年度：第22次発掘調査報告書－』築館町文化財調査報告書第9集
(13) 築館町教育委員会1997『伊治城跡－平成8年度：第23次発掘調査報告書－』築館町文化財調査報告書第10集
(14) 築館町教育委員会1998『伊治城跡－平成9年度：第24次発掘調査報告書－』築館町文化財調査報告書第11集
(15) 築館町教育委員会1999『伊治城跡－平成10年度：第25次発掘調査報告書－』築館町文化財調査報告書第12集
(16) 築館町教育委員会2000『伊治城跡－平成11年度：第26次発掘調査報告書－』築館町文化財調査報告書第13集
(17) 築館町教育委員会2001『伊治城跡－平成12年度：第27次発掘調査報告書－』築館町文化財調査報告書第14集
(18) 築館町教育委員会2002『伊治城跡・嘉倉貝塚－平成13年度：第28次発掘調査報告書－』築館町文化財調査報告書第15集
(19) 築館町教育委員会2004『伊治城跡－平成15年度：第29次発掘調査報告書－』築館町文化財調査報告書第17集
(20) 築館町教育委員会2005『伊治城跡－平成16年度：第30次発掘調査報告書－』築館町文化財調査報告書第19集

引用・参考文献

- 加美町教育委員会2005：『東山遺跡Ⅶ』加美町文化財調査報告書第7集
栗駒町教育委員会1995：『長者原遺跡』栗駒町文化財調査報告書第3集
進藤秋輝1991：『古代城柵の設置とその意義』『北からの視点』日本考古学協会 1991年度宮城・仙台大会資料集
pp. 131～142
東北学院大学考古学研究部1972：『鳥矢ヶ崎古墳群発掘調査概報』『温故』第7号
築館町教育委員会2003：『嘉倉貝塚』築館町文化財調査報告書第16集
築館町教育委員会2005：『腰沢遺跡』築館町文化財調査報告書第18集
宮城県教育委員会1978：『糠塚遺跡』『宮城県文化財発掘調査略報（昭和52年度分）』宮城県文化財調査報告書第53集
pp. 41～198
宮城県教育委員会1980a：『原田遺跡』『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅱ』宮城県文化財調査報告書第63集 pp. 409～423
宮城県教育委員会1980b：『宇南遺跡』『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅲ』宮城県文化財調査報告書第69集 pp. 501～556
宮城県教育委員会1980c：『大門遺跡』『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅱ』宮城県文化財調査報告書第62集 pp. 273～306
宮城県教育委員会1980d：『佐野遺跡』『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅱ』宮城県文化財調査報告書第63集 pp. 425～546
宮城県教育委員会1982：『御胸堂遺跡』『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅳ』宮城県文化財調査報告書第83集 pp. 307～584
宮城県教育委員会1983：『佐内屋敷遺跡』『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅴ』宮城県文化財調査報告書第93集
pp. 289～546
宮城県教育委員会1998：『宮城県遺跡地図』宮城県文化財調査報告書第176集
宮城県教育委員会2003：『嘉倉貝塚』宮城県文化財調査報告書第192集
宮城県教育委員会2005：『下萩沢遺跡・原田遺跡調査成果の概要』『第31回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』
pp. 287～292
宮城県多賀城跡調査研究所2001：『宮城県多賀城跡調査研究所年報2000』（第71次調査）
宮城県多賀城跡調査研究所2003：『宮城県多賀城跡調査研究所年報2002』（第73次調査）
宮城県教育委員会2004：『原田遺跡・下萩沢遺跡現地説明会資料』
加美町教育委員会2005：『東山遺跡Ⅶ』加美町文化財調査報告書第7集
栗原寺調査団1963：『栗原寺の諸問題』『栗駒町史』追録第二 pp. 1135～1147

付表2 伊治城および栗原郡に関する古代史年表

| 西暦 | 和暦 | 記事 | 文献 |
|-----------------|---------------|---|------------------------------|
| 767 | 神護景雲 1 | 10. 伊治城の造営なる。造営にたずさわった鎮守將軍田中多太 麻呂らに叙位、外從五位下道嶋三山は從五位上を賜う。 | 統日本紀 |
| 768 | 2 | 12. 陸奥や他国の百姓で伊治・桃生に住みたいものの課役を免 ずる。 | 統日本紀 |
| 769 | 3 | 1. 伊治・桃生にうつり住みたいものの課役を免ずる。 2. 桃生・伊治に板東8国百姓を募り安置しようとする。 6. 栗原郡を置く。これはもと伊治城である。 (「統日本紀」では神護景雲元年11月乙巳条に収めるが錯簡 とみられ、ここでは神護景雲3年6月9日乙巳説をとる) 6. 浮宮の百姓2,500人を伊治城に遷す。 | 統日本紀 統日本紀 統日本紀 統日本紀 |
| 780 | 宝龟 11 | 3. 上治郡大領伊治公皆麻呂は牡鹿郡の大領道嶋大橋、按察使 紀広純を伊治城で殺す。ついで、多賀城にせまり府庫の物 をとり放火する。 | 統日本紀 |
| 792 | 延暦 11 | 1. 斯波村の夷胆沢阿奴志己らは帰服したいが伊治村の伴に妨 げられて果たせないでいることを訴える。 | 類聚国史 卷190 |
| 796 | 15 | 11. 伊治城と玉造塞の中間に1駅を置く。 11. 相模・武藏・上総・常陸・上野・下野・出羽・越後などの 住民9,000人を伊治城を遷し置く。 | 日本後紀 日本後紀 |
| 804 | 23 | 11. 栗原郡に3駅を置く。 | 日本後紀 |
| 837 | 承和 4 | 4. 3年春より百姓の妖言に奥邑の民が動搖し、栗原・賀美両 郡の百姓多く逃亡する。また、栗原・桃生以北の俘囚は反 覆して定まらないので援兵1,000人を差発して非常に備え る。 | 統日本後紀 |
| 905 | 延喜式 (着手) 5 | 延喜式 ○神名式 陸奥国100座 栗原郡7座 大1座 表刀神社 小6座 志波姫神社 雄悦神社 駒形根神社 和我神社 香取御兒神社 遠流志別石神社 ○民部式 東山道・陸奥国大國 ……志太、栗原、磐井…… ○兵部式 陸奥国駿馬 ……玉造、栗原、磐井…… 各5疋 | 延喜式 |
| 931 & 938 | 承平年間 | 和名類聚抄 陸奥国 栗原郡(久利波良) (郷名) 栗原・清水・仲村・会津 | 和名類聚抄 |

報告書抄録

| ふりがな | いじじょうあと | | | | | | |
|--------|---|--------------|----------------------------------|------------------------|----------------------|------------------------|------------|
| 書名 | 伊治城跡 | | | | | | |
| 副書名 | 平成17年度伊治城跡発掘調査概報 | | | | | | |
| 卷次 | | | | | | | |
| シリーズ名 | 栗原市文化財調査報告書 | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第1集 | | | | | | |
| 編著者名 | 千葉 長彦 大場 亜弥 安達 訓仁 三浦 実 | | | | | | |
| 編集機関 | 栗原市教育委員会 | | | | | | |
| 所在地 | 〒987-2215 宮城県栗原市築館高田二丁目1番10号 TEL 0228-23-2228 | | | | | | |
| 発行年月日 | 西暦2006年3月30日 | | | | | | |
| 所取遺跡名 | 所在地 | コード | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 m ² | 調査原因 |
| 伊治城跡 | 宮城県栗原市築館字城生野 | 042137 41007 | 38度45分50秒 | 141度02分40秒 | 20050829～20051025 | 200 | 重要遺跡範囲確認調査 |
| 所取遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 | | |
| 伊治城跡 | 城柵跡 | 奈良～平安時代 | 掘立柱建物跡 築地跡、土取りによる溝状遺構 整地地業 | 土師器 須恵器 平瓦 石器 | 外郭南辺部において外郭南門跡を発見した。 | | |

付表1 伊治城跡の発掘調査

◎多賀城跡調査研究所による調査

| 年次 | 調査原因 | 発掘面積 | 発掘期間 | 主な検出遺構と出土遺物 | 文献 |
|------------------|---------------------------|---------------------|-------------|------------------------------------|-----|
| 昭和51年度 (1976) | 地形図測量(航空測量) 現地踏査・研究史整理 | | | | |
| 昭和52年度 (1977) | ①外郭北辺区画施設発掘調査 | 168m ² | 7/4~8/3 | 大溝1、土壙1、土壙状遺構1 焼失窓穴住居1、墨書き器「城厨」 | (1) |
| | 外部北部発掘調査 | 270m ² | | | |
| 昭和53年度 (1978) | ②外郭北辺区画施設発掘調査 | 780m ² | 7/3~8/4 | 掘立柱建物1、竪穴住居4 | (2) |
| | 外郭南辺区画施設電気探査 | | 11/11~11/13 | | |
| 昭和54年度 (1979) | ③外郭北部発掘調査 | 1,000m ² | 10/29~12/4 | 掘立柱建物2、竪穴住居17 | (3) |

◎栗原市教育委員会・宮城県教育委員会による調査

| 年次 | 調査原因 | 発掘面積 | 発掘期間 | 主な検出遺構と出土遺物 | 文献 |
|------------------|--------------|---------------------|-------------|--|------|
| 昭和62年度 (1987) | 1.農道整備 | 220m ² | 7/1~8/12 | 竪穴住居5(焼失1) | (4) |
| | 2.農協支所移転 | 150m ² | 7/4~7/18 | 竪穴住居1 | |
| | 3.個人住宅便換取付 | 2m ² | 8/5 | | |
| | 4.水道管理設 | 1,250m ² | 9/1~9/14 | 竪穴住居8 | |
| | 5.農道整備 | 1,080m ² | 1/18~2/9 | 竪穴住居7 | |
| | 6.畜舎建築 | 80m ² | 2/25 | | |
| 昭和63年度 (1988) | 7.国庫補助事業 | 1,500m ² | 7/1~10/30 | 内郭外溝、竪穴住居2 | (5) |
| | 8.水道管理設 | 142m ² | 11/4~11/24 | 外郭東辺大溝? 竪穴住居3 | |
| | 9.農道整備 | 504m ² | 2/6~2/12 | | |
| 平成元年度 (1989) | 10.宅地現状変更 | 480m ² | 4/11~6/1 | 掘立柱建物1、竪穴住居9、土器埋設1 | (6) |
| | 11.国庫補助事業 | 1,200m ² | 7/21~11/22 | 【内郭北西】区画施設・外溝、掘立柱建物3、竪穴住居10 | |
| | 12.通学路整備 | 1,700m ² | 9/5~9/16 | 外郭北辺大溝、古墳前期居館区画溝 | |
| | 13.農道整備 | 1,960m ² | 10/16~11/20 | 内郭区画施設・外溝。【政庁】正殿、北西建物 | |
| 平成2年度 (1990) | 14.水道管理設 | 170m ² | 11/29~12/8 | 竪穴住居? 3 | (7) |
| | 15.国庫補助事業 | 900m ² | 9/3~9/29 | 【内郭北西】掘立柱建物3、竪穴住居8 | |
| | 16.道路整備(大堤線) | 1,320m ² | 9/27~10/5 | 外郭東辺大溝? 【外郭北部】竪穴住居16 | |
| 平成3年度 (1991) | 17.国庫補助事業 | 1,300m ² | 5/27~7/16 | 【政庁】正殿・北殿・北西建物・北東建物・塚地 | (8) |
| | 18.個人住宅 | 300m ² | 11/19~12/2 | 古墳前期居館 | |
| 平成4年度 (1992) | 19.国庫補助事業 | 1,300m ² | 5/11~7/4 | 【政庁】正殿・前殿・西脇殿・目隠扇・南門・塚地 【内郭南西】築地? 掘立柱建物2、竪穴住居1 | (9) |
| | 20.国庫補助事業 | 1,500m ² | 10/4~11/18 | 【内郭南西】築地? 掘立柱建物5、竪穴住居2 【内郭東端】区画施設・外溝、掘立柱建物1、竪穴住居5 【外郭南端】掘立柱建物2、竪穴住居7、溝 | |
| 平成6年度 (1994) | 21.国庫補助事業 | 820m ² | 10/3~11/27 | 【内郭北隅】区画施設・掘立柱建物1、竪穴住居9 【内郭南端】掘立柱建物5、竪穴住居3 | (10) |
| | 22.国庫補助事業 | 1,140m ² | 10/5~11/14 | 【内郭北隅】掘立柱建物1 【外郭北隅】区画施設・大溝 【外郭北端】掘立柱建物1 【外郭南端】掘立柱建物3 | |
| 平成7年度 (1995) | 23.国庫補助事業 | 450m ² | 10/7~11/7 | 【外郭西辺】区画施設・大溝 【外郭西端】掘立柱列1、竪穴住居1 | (11) |
| | 24.国庫補助事業 | 480m ² | 10/6~11/7 | 【外郭北辺】土壙、大溝、竪穴住居1 | |
| 平成10年度 (1998) | 25.国庫補助事業 | 450m ² | 10/23~11/13 | 【外郭東辺】区画施設・大溝 【外郭南東】掘立柱建物2、竪穴住居8 | (12) |
| | 26.国庫補助事業 | 200m ² | 11/8~11/22 | 【外郭南東端】区画施設・大溝 【外郭南東】竪穴住居12、呼機? 報告 | |
| 平成12年度 (2000) | 27.国庫補助事業 | 500m ² | 10/16~11/8 | 【外郭南端部】掘立柱建物13 | (13) |
| | 28.国庫補助事業 | 400m ² | 11/5~11/15 | 【外郭南西部】 掘立柱建物7、竪穴建物1、竪穴住居2 | |
| 平成13年度 (2001) | 29.国庫補助事業 | 500m ² | 10/3~11/6 | 【外郭南辺部】掘立柱建物、旧石器 | (14) |
| | 30.国庫補助事業 | 450m ² | 11/1~12/10 | 【外郭南辺部】 掘立柱建物2、土取りによる溝状遺構 | |
| 平成15年度 (2003) | 31.国庫補助事業 | 200m ² | 8/29~10/17 | 【外郭南辺部】 掘立柱建物、塚地廻、土取りによる溝状遺構 | (15) |
| | | | | | |

※旧栗原町教育委員会による調査(1987~2004)

写 真 図 版



遺跡南側遠景（南東より）



調査区全景（上が北）

SB660 建物跡
(北より)



SB660 建物跡
(北より)



調査区東側 (西より)



調査区西側（西より）



調査区西側（西より）



調査区西側（北より）



写真図版 3



SB660 建物跡
柱穴 S1E1
(南より)



SB660 建物跡
柱穴 S2E1
(南より)



SB660 建物跡
柱穴 N1E1
(北より)

S8660 建物跡

柱穴 S2E2

(西より)



調査区中央

焼け面(南より)



3 トレンチ

SX672 整地層

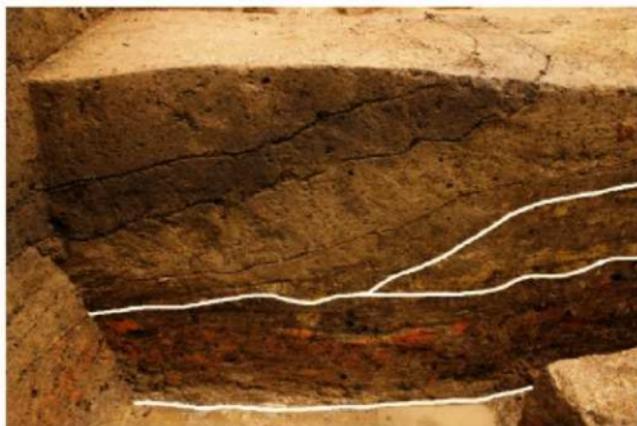
・ SX669 土取り穴

(南東より)





4 レンチ
築地壠または
土壘の基底部断面
(西より)



5 レンチ
SX675 整地層断面
SX667 土取り穴断面
(西より)

SX667 土取り穴出土
の焼け壁



S = 1/2

栗原市文化財調査報告書第1集

伊治城跡

印 刷 平成18年3月29日

発 行 平成18年3月31日

発 行 宮城県栗原市教育委員会

〒987-2215

宮城県栗原市築館高田二丁目1番10号

TEL 0228-23-2228

印 刷 南部屋印刷株式会社

宮城県栗原市築館高田一丁目7番36号
